

## じっきょう

地歴・公民科  
資料No. **100**

もくじ

巻頭	入試特集 大学入学共通テスト 「歴史総合、日本史探究」 河合塾日本史科講師…………… 1 「歴史総合、世界史探究」 河合塾世界史科講師…………… 2 「公共、倫理」「公共、政治・経済」 河合塾公民科講師 4 「地理総合、地理探究」 河合塾地理科講師…………… 5
特集	改訂教科書のご案内…………… 6
論説	アメリカ大統領選後のアメリカと世界 上智大学教授 前嶋 和弘 …………… 12
論説	大分岐論争をどう考えるべきか 京都産業大学教授 玉木 俊明…………… 16 「大国インド」の不都合な真実 アジア経済研究所 研究員 湊 一樹…………… 20
図書紹介	…………… 24

巻頭

## 入試特集 大学入学共通テスト

## 「歴史総合、日本史探究」

河合塾 日本史科講師

## 問題構成

大問数6問・マーク数33問であった。内訳は、第1問が歴史総合で設問数8、配点25点であり、第2～6問が日本史探究で設問数各5（計25）、配点各15点（計75点）であった。

時代構成は、第1問が歴史総合、第2問が古代から近代にかかわるテーマを扱った探究活動の設定（25年度は「菓子に着目した探究活動」）、第3問が古代、第4問が中世、第5問が近世、第6問が近現代であった。前近代と近現代の割合は、歴史総合込みではほぼ6：4であり、これは昨年度までの日本史Bにおける前近代と近現代の割合とほぼ同じであった。なお、第二次世界大戦後の現代史を単独で扱った設問は歴史総合1題、日本史探究2題の計3題であった。

分野構成は、歴史総合は外交が4割、社会経済が1割、外交・社会経済を軸とする総合問題が5割と全体に外交・社会経済中心であった。日本史探究では社会経済が4割5分、政治と外交が各2割、文化が約1割5分と社会経済の割合の高さが目立った。

## 形式

文章正誤問題が最も多く、全体の約5割を占めた。ついで短文と語句などの組合せ問題が2割、空欄補充問題が1割強、年代配列問題・その他が各約1割と続いた。また、空欄補充問題といっても、私大に顕著な単に歴史用語や人名を入れさせる問題は少なく、共通テストになって以来の傾向といえるが、空欄補充問題で思考力・判断力を問おうという工夫がみられる。25年度は会話の展開を受けて短文を入れさせる空欄補充問題が出題された（**4**・**22**）。同様の工夫は年代配列問題にもみられ、歴史用語の使用を極力抑えた文を作っている（**26**・**31**）。全体に歴史用語のみで答えさせる、あるいは判断させる問題は少なく、形式面でも思考力・判断力を問う姿勢を打ち出しているといえよう。

## 出題傾向

全33問を、知識・技能を問う設問（以下a）、思考力・判断力を問う設問（以下b）、両方の要素がある設問（以下c）の3つに分類し、2021～2024年度本試験や、2020年度センター試験、2018年度試行調査と比較してみた。次頁の表を見てほしい。

共通テストがセンター試験に比して思考力・判断力を問おうとしていることは、この比較からも

	a 知・技	b 思・表	c 両方
2018 試行調査	9	9	18
2020 センター本試験	34	0	2
2021 共通本試験	19	3	10
2022 共通本試験	12	0	20
2023 共通本試験	6	0	26
2024 共通本試験	11	0	21
2025 新課程本試験	2	1	30

明らかであり、新課程元年の2025年度は一層その傾向が強まったといえる。また、思考力・判断力を問うために史料・図版・地図・統計表・統計グラフといった諸資料が多用され続けていることも重要な傾向である。2025年度の特徴的な動向としては、文献資料において現代語訳された資料を多く使った点があげられるが、少しでも受験生の負担を減らそうとの配慮であろうか。さらに、2022年度から高校生の主体的な学びをふまえた場面設定が増えているが、科目名が「歴史総合、日本史探究」と改まった2025年度は、ついに全大間で高校生が登場し探究や考察などを行う設定となり、うち3問が会話であった。会話は、学習指導要領が強調する「主体的・対話的」な学びの確認には適している形式といえ、今後もこうした傾向は維持されると思われる。

## 対策など

### ○「歴史総合」について

大学入試センターが2022年秋に公表した試作問題では、日本史探究の教科書には記載がない世界史の知識が必要な設問はほとんどなかった。しかし、2025年度本試験では、日本史探究の教科書には記載がない世界史の知識が必要な設問が、複数出題された（**3**・**7**など）。したがって、高得点が必要なら歴史総合教科書の世界史分野の学習にも丁寧に取り組む必要があるといえる。

### ○「歴史総合、日本史探究」について

今後も思考力・判断力を様々な形式や諸資料を駆使して問おうとしてくると思われる。常日頃から可能な限り、出来事の因果関係や歴史的意義、教科書に掲載されている諸資料に留意した学習を生徒に心がけさせたい。

### ○資料問題の演習量の確保

諸資料（史料・図版・地図・統計表・グラフ）を利用した問題が出題されるので、「慣れる」ためにも共通テストの過去問などで演習量を確保させたい。

### ○「知識」を強化する必要

共通テスト模試などのデータからも知識型の問題の正答率が低い傾向にあることがわかっている。本試験でも知識型の問題も一定程度は出題されており、何より思考力・判断力養成の前提としても知識を身につけさせる必要性がある。形式・内容面でも旧センター試験と同じような設問も出題されているので、共通テストの過去問だけでなく、旧センター試験の過去問なども大いに利用するなどして、知識面の強化を促したい。

## 「歴史総合、世界史探究」

河合塾 世界史科講師

### はじめに

新課程入試の元年となる2025年度の「歴史総合、世界史探究」共通テストは、2022年に公表された試作問題しか判断材料がなく、どのような入試となるのか非常に注目された。

	試作問題	2025 本試験
問題構成	大問5問 第1問 歴史総合 第2～5問 世界史探究	
問題の特徴	・資料（史料文・図版・地図・表・グラフ）や文章から情報を読み取り、習得した知識と照らし合わせながら探究する問題が多い。 ・生徒たちの探究内容から、その主題を問う問題が出題（第5問）。	
マーク数	33	32
ページ数	40 ページ	34 ページ

結果、試作問題同様、大問5問で、第1問が歴史総合、第2～5問が世界史探究であり、資料や文章から情報を読み取り、習得した知識と照らし合わせながら探究する問題が多かった。ただし、マーク数・ページ数は、上表どおり減少していた。

分野では、政治史や社会経済史が多く、文化史も見られた。世界史探究では、欧米史とアジア・

アフリカ史の比率がほぼ同じで、欧米史では西欧史が、アジア・アフリカ史では中国史が多かった。時代は前近代史が多かったが、近現代史から出題された歴史総合を加えると、前近代史と近現代史の比率はほぼ同じであった。

## 歴史総合

近代化	大衆化	グローバル化
4問	2問	2問

新科目の歴史総合は、上表通り、近代化、大衆化、グローバル化という、3つの大項目すべてから出題されていたが、これらのうち近代化の問題が多く、全体の半分を占めた。

世界史の比率が高かったことは試作問題同様で、日本史のみの小問はなかった。日本史の出題は、世界史の内容と組み合わせるすべて出題されており、その1つが第1問・問2である。

取り上げられている図1の会談の時期・内容などは知らなくてもよい。中国で辯髪が行われていた時期、日本で洋装が取り入れられた時期を問う問題である。日本史に関する「いーY」の組み合わせは多くの受験生ができていたが、世界史に関連する辯髪が行われていた時期がむしろわかっていない受験生が多かった（河合塾「共通テストリサーチ」より、以下同）。歴史総合の世界史に関連する部分は、確実に正解してほしい。

## 世界史探究

世界史では、センター試験・共通テストともに新課程移行や制度変更などが行われる際、新課程や新制度を先取りした問題が移行前から出題される傾向があり、例えば、センター試験の末期には共通テストの方向性として示された内容が出題されていた。今回も近年の共通テスト世界史Bですでに世界史探究的な問題が出題されていたこと、試作問題の方向性と大幅な変更がなかったことから、新課程初年度入試ではあったが、受験生の混乱は少なかったと思われる。

また、求められている知識も、従来の共通テストを継承しつつ、それよりさらに基本的な情報に

絞り込まれていたため、難易度は昨年の世界史Bより易化していたといえる。

今回、資料や文章から情報を読み取り、習得した知識と照らし合わせながら探究する問題が多いと指摘したが、その具体例が、第5問・問1である。

探究の対象となった木簡は解説シートから「7世紀初頭に使用された」ものであること、出土地「扶余」は地図から朝鮮半島南西部に位置することを読み取り、木簡を使用していた「ア」は百済と判断する。そして、メモ1の2項目の「貸し付けた穀物の量に対し、返済済みと未返済との穀物の量の合計が1.5倍」という部分から、「ア」では返済時に5割の利息がついていたこと、3項目から唐の律令には返済時に5割の利息をつけるという明確な規定は見つかっていないこと、4項目から日本の律令には5割の利息についての規定があることを読み取り、日本と共通点がある「イ」は、「ア」が位置する朝鮮半島、利息についての明確な規定が見つかっていない「ウ」は唐と判断する。

ところが、「ア」を新羅と判断した受験生が多く、百済と新羅の位置関係がわからなかったにしろ（地理的知識の欠如）、7世紀初めにすでに新羅が朝鮮半島を統一していたと考えたにしろ（時期に関する知識の欠如）、知識不足が誤答の原因である。そして、「イ」を唐、「ウ」を朝鮮半島とする③の選択者も多かったが、この誤答の原因は読み取りの不十分さにある。

## まとめ

このように「歴史総合、世界史探究」の問題を解くためには、知識力と、資料や文章を正確に読み取る力の両方が必要である。世界史探究について「基本的な情報に絞り込まれていた」と前述したが、それは共通テスト世界史Bより学ぶべき知識量が減ったという意味ではない。確かに扱う用語量はかなり減少したが、用語を直接挙げずに出来事の時期、経緯、因果関係、背景、影響など内容を問う問題が増加している。特に第5問・問1の誤答から判明したように、空間軸と時間軸の把握は必須である。そもそも知識がないと、資料

のどこがヒントかわからない。教科書などを利用した理解を深める学習が必要であり、用語の暗記だけでは対処できない。

歴史総合の日本史部分の攻略は、18世紀以降の世界史を学習する際、同時期の日本の状態や、世界の動きが日本に与えた影響などを確認するクセをつけておくとよい。

「歴史総合，世界史探究」は問題量が非常に多く、形式も多岐に渡るため、模試の活用を通じて演習量を積極的に確保するとよいだろう。

## 「公共，倫理」「公共，政治・経済」

河合塾 公民科講師

### 全体の構成と難易度

2025年度の本試験の配点ウエイトは、「公共，倫理」では「公共 25点，倫理 75点」，「公共，政治・経済」では「公共 25点，政治・経済 75点」となり、いずれも2022年秋に公表された試作問題と同様の配分となった。大問数や設問数も試作問題と同じであり、全体の難易度は、両科目ともに標準的な水準であるといえる。

### 設問分析

本試験で出題された設問については、以下の【1】～【3】に分類することができる。

#### 【1】知識問題

教科書で扱われている知識事項の習得度合いを測る要素を含む設問。「公共，倫理」の全設問のうちの約70%，「公共，政治・経済」の全設問のうちの約90%が知識事項を前提とした設問となっている。

#### 【2】思考力・判断力問題

思考力・判断力問題の形式には様々なものがある。なかでも、以下の(A)～(C)の出題形式は、毎年度、安定して出題されている。

(A)「資料文や説明文，会話文等の趣旨を読み取る力や，そこに示された内容と合致する記述かどうかを判断する力を試すもの」

「公共，倫理」の第3問・問7(ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』からの引用資料文)や，「公共，政治・経済」の第3問・問4(思想の自由市場論に関する引用資料文)などがこれに当たる。特に「公共，倫理」での出題が目立つ。

(B)「図表・データを読み解く力を試すもの」

二つの科目の共通問題である第2問・問2(「国民生活に関する世論調査」の結果)などがこれに当たる。特に「公共，政治・経済」での出題が目立つ。

(C)「教科書で扱われている知識事項や設問内で示された考え方を，具体的事例に適用して判断する力を試すもの。あるいは，具体的事例を，教科書で扱われている知識事項や設問内で示された考え方に分類・整理する力を試すもの」

二つの科目の共通問題である第2問・問3(帰納的推論)や，「公共，倫理」の第5問・問2(認知バイアスの具体例)などがこれに当たる。

#### 【3】【1】と【2】を組み合わせた問題の例

「公共，倫理」の第3問・問9(会話文や日記の内容を踏まえて空欄に入る語句や下線部に関連する記述を判断する複合的な設問)のように【1】と【2】-(A)を組み合わせた問題や，「公共，政治・経済」の第4問・問6(「アラブの春」に対する世論調査の結果を用いた問題)のように【1】と【2】-(B)を組み合わせた問題などがこれに当たる。

### 今後の展望と対策

今後，大問数や大問当たりの設問数に変化があるかもしれないが，配点ウエイトは2025年度の本試験と同様のものとなるだろう。また，出題形式についても，これまでの共通テストの流れを汲むものとなるだろうが，「公共，倫理」の第5問・問5のような連動式の設問の出題が定着するか否かが注目される。

共通テストで受験生が目標得点を獲得するためには，教科書の精読を通じて，知識事項を習得・定着させることが欠かせない。また，共通テストに特徴的な出題形式の問題については，ある程度の練習を積み重ねておく必要がある。練習を積み

重ねるためにも、共通テストの過去問や各種模擬試験を積極的に活用したい。

## 「地理総合、地理探究」

河合塾 地理科講師

### 問題構成と解答形式

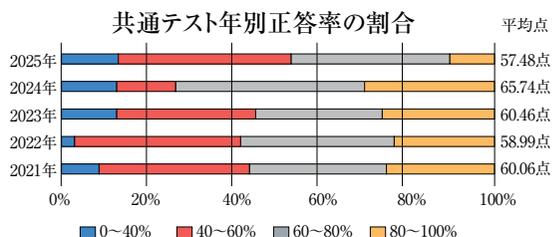
大問は6題で、2題は地理総合、4題は地理探究からまんべんなく出題された。テーマは新課程に沿っているが、これまでの地理Bと大きな違いはみられなかった。各設問とも地図や統計表、グラフなどの資料が用いられ、設問数（マーク数）が30で、問題冊子は昨年度までの地理Bと同様に34ページであった。2022年秋に公表された試作問題よりは2ページ少なく、試作問題では10問あった複数の資料（番号のついた資料、図、表など）の判読を必要とする設問も、本試験では2問のみで、試作問題に比べると取り組みやすく、適切な分量に収められたといえる。

大問	設問内容	配点	平均点	正答率 (%)
1	食料の生産や消費	13	8.4	65.5
2	愛知県東部東三河地域の地域調査	12	6.3	52.1
3	世界の自然環境と自然災害	20	11.5	58.7
4	エネルギーと産業	21	11.0	54.3
5	産業構造の変化に伴う都市の変容	17	11.6	67.6
6	環インド洋地誌	17	8.8	54.1

大問別の平均点、正答率は「河合塾『共通テストリサーチ』」による。

### 難易度と象徴的な問題

平均点は57.48点で、昨年度の地理Bに比べ8.26点低く、大学入学共通テストが実施された2021年以降の地理Bと比較しても最も低かった。その理由としては、図に示したように、正答率が80%を超える設問がわずか3問で、昨年度の地理Bの9問に比べ大きく減少したのに対し、正答率が40%を下回る設問が4問と変わりがなかったことが挙げられる。すなわち、誰もが正解できるような平易な問題は少なく、資料をしっかり読み込んできちんと考えて判断しなければ正解できない問題が多かったといえる。



具体的な設問では、正答率28.7%と低かった第3問・問5は、地球温暖化の気温上昇別の面積割合のヒストグラムを示し緯度30～40度帯と80～90度帯、北半球と南半球の組合せを判断する4択問題で、問題文には「海水に覆われた海は日射を反射するため、海水面積の増減は気温上昇に影響を与える」と、北極海の海水の融解の影響を手掛かりとして与えている。4つの各選択肢のマーク率はほぼ均等で、多くの受験生は判断の決め手を見出せなかったと思われる。正答率は低いが資料の的確な判読と論理的思考力が試される共通テストらしい問題であった。一方、第3問・問6は日本のある沿岸地域における津波への備えを、GISを用いて検討する方法を模式的に示した図の判読に関する問題で、図を重ね合わせて分析できる値の組合せを答えさせている。単なる図の判読ではなく、模式図でGISと防災に関して実践的な対策を考える、探究型の授業を想定した問題といえる。丁寧に作成された模式図はしっかり読めば判断は可能で、正答率は88.1%ときわめて高かった。

### 学習対策と今後の指導

共通テストでは細かな知識を求める問題は少なく、さまざまな資料の判読と基本的な知識をもとに論理的に思考する力を試そうとする出題意図が明らかである。学習指導でも自然環境の成因や産業の立地論など、基本的な理論から合理的に判断できることを生徒に実感させることが重要である。資料の判読は問題演習を通じた指導が効果的で、「何がわかれば判定できるか」といった視点から、問題を解くために必要な基礎的知識の重要性も伝えたい。